所沢

龍渓矢野文雄先生（六）

佐伯史談会
賛助会員　山内武麒

外遊

龍渓先生は、遂に明治十七年（一八八四年）四月、長男の春をあとに、旅装をととのえて横浜港を出発した。

その頃の欧洲航路には、まだ日本の汽船は一隻もなかった。先生の乗った船もフランスの郵船であった。同船した道ずれの中に、侍医の岩佐純と、大隈病院で有名な内科医樫村清徳がいたので、何か身体に異状あるときはすぐ手当ができるので、この上まない心強い同行者であった。

マルセーユに上陸したのが五月の末日。先生はリヨンへ赴いた。そこには科学小説家ジュール・ヴュルヌ氏の「八十日世界一周」の翻訳で知られた、川島忠之助がいて歓待してくれた。しばらく滞在したが、間もなくパリーに行き、悠々とパリーの初夏を楽しんだ。六月の中頃にはフランスの知名政治家を歴訪して、さまざまの意見を交換したが、その中には後年、欧洲の一次大戦の時、フランス首相として、ヴェルサイユ條約の締結に努力したクレマンソーもいた。この時分のクレマンソーは、ちょうど四十才頃の働き盛りであった。この後三十年間に十八の内閣を倒して、常に保守党の心胆を寒からしめたというつわもので、フランス政界では注目をあつめた少壮政治家であった。

ともあれ、日本新聞記者の肩書でヨーロッパを訪れた者は、先生が第一号とされた時代であったから、パリーの社交界では珍客として大いにもてはやされ、特別の取扱いを受けた。この年のロンドンの或る雑誌の中には、「当年パリーに於ける交際シーズンの珍客の一人は、日本の新聞記者ノミオ・ヤノである」と書きたてるものさえあった。しかし当時はまだ日露戦争も勃発、日清戦争も起こらなかった時代で、日本の国威は未だ発揚されなかったから、よほど世界の情勢に明かるい人でない限り、日本の新聞さえ知らず、知っていてもせいぜい支那の属国かなどのように思っている者が多かった。

また先生はレセップにもしばしば会った。レセップはいうまでもなく、スエズ運河の開さく者として知られているが、その頃はパナマ運河の開さくに着手して間もない時で、意気軒昂まさに当るべからざるものがあった。「遂年後この事業が完成した暁には、運河開きに世界各国の軍艦を通過させたい」などと先生に語ったものであった。もう七十才をこえていたのに、なお矍鑠（かくしゃく）として愛嬌をたたえながら、この東洋の若い旅人に、何くれと気さく話してくれたということである。

先生は、その年の七月パリーからロンドンに移った。当時のイギリスはヴイクトリヤ女王の全盛時代であった。もちろんその頃、自由党の首領グラッドストンが内閣の首班で、自由党が多年唱導して来た、改正選挙法を実施しようとする時であった。この新しい選挙法は、イギリスに於ける最初の普通選挙制で、「人民代表條令」と呼ばれたものである。イギリスの立憲政治を調査することと

を主眼として渡欧した先生にとっては、この上ないよい機会に恵まれたものである。

先生は英国議会の下院の傍聴席で、親しくグラッドストンの首相ぶりを見た。しばしば選挙法の討議の模様も見た。単なる議事の進行を見学するだけでも非常に参考になるのに、議せられたものが、当時世界で最も進歩的な案といわれた新選挙法案であったので、先生にはどれほど得るところが大きかったか知れない。しかも明治十八年（一八八五年）にこの新選挙法による、初の総選挙を見ることができた。新たに選挙権を得た労働階級、所謂新興階級の活動ぶりや、駆引や、演説会や、ポスターや、政党新聞の論調や、さては投票の実際等々、細大余すところなく、あらゆる方面から選挙戦の様相を視察した。そのため、市といわず、町といわず、村といわず、諸方面をわれを忘れて駆けずり廻った。候補者の演説会場へなどはよく出掛けたが、「東洋の紳士が来た」というわけで、聴衆は先生を上席へ案内したところもあったという。

それから先生は、予定通り再びフランスに渡り、イタリヤへと行脚した。これは急がぬ旅であったから、時には名も無い寒村に泊って、ヨーロッパの田舎生活を親しく味わったこともある。悠々と南欧の風景を楽しみ、遍歴の詩情をそそりながらローマを訪れた。ところが好事魔多しというか、ローマ滞在中に発病して、二か月ばかり寝込んでしまった。この思いがけない病気のため、ギリシヤの古蹟をたずね、オーストリヤからスイスを経てドイツに入り、ドイツからイギリスに帰る予定を変更して、イタリヤからフランスに引き返し、七月フランスからロンドンへ帰った。

再びロンドンの人となった先生は、本業である新聞事業の調査をはじめ、市中の主なる新聞社を歴訪した。そしてその編輯や印刷などの状況を、つぶさに視察して新知識を得た。

こうしているうちに、八月になって先生の令弟武雄が渡英してきたので、先生の身辺は急ににぎやかになった。先生はこの武雄の助けを借りて、「国遊雑記」の原稿を書いて日本へ送った。またこの時ここで、加藤高明と親しく交ることになった。加藤は後に憲政会総裁となり、総理大臣になったことはあらためて説くまでもないが、この当時の加藤は大学を出て間もない頃で、三菱社員として事務見習のため、ロンドンに派遣されていたのである。彼は英語が堪能で、在留邦人の中に会話も英文で彼にまさるものは一人もいなかった。先生は滞英中新聞社や知名士を訪問するとき、いつも通訳者として加藤を連れて行ったという。

先生が在英三年目の春、即ち明治十九年（一八八六年）四月には、文士森田思軒も渡英してきて、先生の宿に同宿した。五月には先生は森田を伴い、初夏の陽を浴びながらかねてからの望みであったドイツ歴訪を実現しようと、三たびフランスに渡り、ベルジュームへ直行して、同国の農園などを視察し、つづいてラインを遡りドイツの各地を歩いてベルリンへ入った。

当時ドイツは独仏戦争に大勝しドイツ帝国統一の大業が成就してその威勢はすさまじく、鉄血宰相ビスマルクはなお健在で権力をふるっていた。しかし、先生はドイツではただ一人の観光客として各地を漫遊し、約三か月の後またロンドンに舞い戻った。

これで一応渡欧の目的は達せられたので、弟武雄と森田と一しょに一しょに、三年間起居した想い出多いロンドンに別れを告げ、愈々帰国の途についた。大西洋を渡

つてアメリカに入り、ニューヨークに一二週間滞在してシカゴに移り、サンフランシスコに出て汽船に乗つて、無事横浜に着いたのが秋風吹き初める十九年の九月であつた。

帰朝してみると、ロンドンで書いた「周遊雜記」は早や出版されて、世間の注目を浴びていた。この書は先生が三か年間に見聞した欧洲諸国の人情風俗へ特に英国のものが多い）を、通俗的に書きあらわしたもので、先生が帰朝する前すでに五、六版を重ねていた。

「報知新聞」の改革

龍渓先生が洋行している間に、わが国内では行政上種々な改正が行われたり、政界には色々な問題が起つていた。特に目立つたことは、民権運動が往年の意気を失い、次第に沈滞する傾向にあつたことである。

先生が渡欧した年の十月には自由党は解散され、その後二か月にして十二月には大隈と河野とが、表面上ではあつたが改進党を脱党した。これまで自由、改進の両党が、互に相せめぐの愚をくり返し、世の人たちはこれを見て嫌気がさして、政党運動においてきたあらわれであつた。

ヨーロッパ滞在三年、じつくりとその文物制度を研究してきた先生は、日本の政治運動が余りにも功を急ぐ傾向にあることを悟り、今後はじつくりと持久策をとつて、徐ろに憲政樹立に取組む方が得策であると考えた。しかし先生には、このことよりも、もつと急を要する問題があつた。それは新聞「報知」の改革のことであつた。

前述べたように、元来龍渓先生が「報知新聞」を買収した目的の一つは、先生一派の梁山伯にすることであつた。しかるに同社の同人たちは、いずれも立憲思想の鼓吹や、党勢拡張のため日夜奔走していたので、おのずから新聞経営の方はおろそかにする傾きがあつた。その上反政府の立場にある新聞だから、絶えず官憲の圧迫を受けていたので、社の経済状態は火の車で、益々不振を極めていた。ある篤志家の援助も受けていたものの、負債は増すばかりであつた。

こんな状態は先生が滞欧中にはどくなつたもので、十八年十二月に先生はロンドンから大隈にあてて、新聞経営に関する意見書を送つている。少し道草を食うが、この言々句々涙で綴られた書翰を読むと、先生と大隈との関係、先生の温い友情、新聞の編輯経営に対する識見、没落に頻した報知新聞に関する先生の悲壮なる心境がよく分かるので、敢えて書き記すことにする。

（前略）

一、報知新聞の事は最初より小生首謀者に有之、若し結局不都合の事あらんときは、小生一身を以てその弊に当り、他の朋友には一人もその累をかけず謝罪と、あらかじめ貫徹致し居候事。年田口君（元学）の知きは、本と何れも古に関係なき地位なるに、これに関せしが為に、今日にしては彼の資産の幾分をさへ抵当と為し居る上に、絶えず心痛憂慮まで致させむるに至り申し候。これ同君の義侠心より生ぜしことなれば彼女がら、本と皆小生の罪に有之候。また藤田（茂吉）の如きも本と野徳の生涯にて、小生に比すれば功名心も少く、文芸の才名を帯て楽しく世を過ごし候有様なりしに、小生との親交の故に小生と事を共にし、ついに今日の如き痛心を致す境界に立たしめたり。本を申さばこれもまた小生一人の過ちに有之候。左れば新聞の進捗到底覚束なき時節に至らば年田口、藤田両兄の名

前の負債を悉皆小生の名前に改めおき、後ち貝事に新聞を廃し、小生一人身代限りを致し可申、左すれば右両人の上には別に負債も無之、また他の事業を為して楽しく生涯を送られ可申候。右は小生平日の決心に御座候。勿論右の如く致すときは、小生の一身は最早亡それまでに沈淪致し候事なれども、自ら事を始めて自らその弊に当り候は当然の事で、今更悲しむに足る事無之、ただ些少の累をも朋友に及ぼさざるを以て自ら慰め候より外無き訳に有之候。

右は極々結局の処置にて、斯く為る時は最早小生は死物と同様にて、多年苦心せし事業は万論廃絶に帰し候のみならず、小生によって暮し候一家親類に至るまで悲境に沈淪致し候事なれば、実に力のあらん限りこの処置をば避け度きは人情に御座候。実に右の策は小生の一身のみならず、一家全体の浮沈に関し候事なれば、家名に対し祖先の位牌に対し、涙を揮て後にこれを行い候者に御座候故に、これを避くる策のあらん限りはこれを試み度は勿論の事に御座候。去りながら盛衰死生は人力の及ぼざる所ありて、如何なる名士といへども時としてこれを免るべからざるの例は古より多々有之候得共、死方にも色々有之、あるひは潔く死して名を留めたるもあり、あるひは醜くのたれ廻りて狂死を為し汚名を天下に遺したるもあり。小生はただ死すべき時に狂死を為さざらんものと、平生心がけ居り候事に御座候。今日閣下に懇願仕候処はただ貝苦しき狂ひ死を免れんと欲する事に御座候。

右の如き存意に御座候へば、今日小生に遺存致候はただ二策にて潔き討死を致すかあるひは手配きをなへ、必勝の戦ひを為すかの二事に御座候。潔き討死とは「小生帰朝の上は直に金田口、藤田の負債を小生の名前に改め、小生は一日新聞に下さずして新聞を廃し、身代限りを為す」の意に御座候。また必勝の戦ひとは小生の考案の如く、手配を整へ新聞を興隆するの意味に御座候。また狂死とは手配を整はざるに新聞に手を下し、あがき廻りて狂死を為し、天下人に笑はれながら新聞を廃絶するの有様を申す事に御座候。

（中略）

新聞の如きも、他社との競争の有様は戦場と異ならずして、その戦争の勝敗の理もまた幾んど同様に御座候。来年の夏に小生帰朝致すとなし候日んに、小生一人にて社説より雑報、外報、会計まで八方の事に当り候はば、三面六臂の化身にもあらざれば、思ふ事の十分の二三もこれを行ひ得ずして、半年を経ざる内に病気を発し候か、あるひは心の如くなし得ずして新聞を衰廃せしむるか、右の二つは鏡に掛けて見るより明かに御座候。閣下は内状を御詳知不被為在候故に「小生帰朝して社員を使用せば、現在の社員だけにて充分の」と斯の如きは即ち前に申上候「あがき死」「狂ひ死」に御座候。働きを為し得て、新聞も幾分か興隆すべし」と御望みを属せられ候哉と討ぐれず候得共、実際は決して左様には御座無く候。その仔細は当時の社員等は小生の使用に堪へ難き理由御座候得ば也。

社員藤田、箕浦、尾崎は不及申、芳川、牧田に至るまで皆得難き有用の材に御座候。乍去新聞は新聞の働きありて、今日の新聞は明治七八年の新聞にあらず。世界の事を以て日本の新聞と為さざるべからざる時節と相成申候。（中略）社員は一も海外の瑣事をだに知り居る者無之候故、小生が一々何事も夜毎に講釈をなして記載せしめざるを得ず、社説雑報外報その他の事柄まで一々小生が講釈をなし候様の有様にてはとても奇

拔敏捷の懸け引きは出来申すべからず。（中略）承る延にては当時時事新報最も盛んの由なれば、假りに之を対敵者と見做して比較し候はんに、右新聞の脳髓たる福沢にて候得共、若し福沢一人にて他に羽翼無くしてはとくに福沢は斃れ居るべし。幸むにその羽翼として海外の事を知り居る者両三名有之が故に各その力を方面に尽し、今日の盛んを見る事に御座候。（中略）

僅か両三月の政洲滞留にても、新聞社員に必要なる ゆえん 左の通りに御座候。新聞社員に必要なるは深き学芸にもあらず。また深き技術にもあらず、唯俗事を知るの一事に御座候。（以下略）

この書簡でわかるように、先生は在英中ロンドンに於ける有力な各新聞を調査しながら、「報知」の復興策を考え腹案を立てて、帰朝すると直ちにその改革に着手した。」とあるが、その改革が思い切った大英断に出たので、当時の新聞界に一大衝動を与えたことはいうまでもない。

龍溪先生は先ず第一に、新聞定価の引下げを断行した。当時白米の相場が一升十銭内外であったのに「報知」の購読料は月八十三銭であった。これに郵税を加えると一円八銭になる。「報知」一か月の購読料で一斗以上の米が買えるわけであり、非常に高い値段であった。先生はまずこの購読料に着目した。ヨーロッパに於ける新聞の普及程度と、新聞と物価との割合を対照して、日本の新聞が一般民衆に行きわたらないのは、その料金があまりにも高すぎるのが一大原因であるとして、遂に一か月三十銭と大胆に値下げした。当時第一流新聞として自他ともにゆるしていた「報知」が、他に先んじて断行したこの大英断は、新聞界の心胆を寒からしむるものであった。

第二の改革は記事の内容であった。当時の新聞、殊に大新聞と称せられたものは、自ら高ぶって、多く政論など硬い文章を書きつらね、知識階級だけを相手にして、一般の民衆は忘れている傾向であった。いわゆる社会記事を載せたり、挿絵を入れたりするを避け、小説などは女子供の喜ぶものといって軽視し紙上には載せなかった。先生はこれが新聞を民衆化しない原因の一つであるとして、文章を通俗化し、むずかしい漢字を避けること、振仮名をつけること、雑報をわかりやすく書くことなどをして、その上小説も載せることにした。

先生は自分から論説に筆を執る傍ら、小説も書いて世間の人気をわき立たせた。先生が「三千字引」なるものを編さんして、わが国で初めて漢字制限を主張したのもこの頃のことである。

同時に先生は、編輯部の組織を統一し、新進気鋭の士を次々と採用した。編輯方針の改革に応じて、新聞の紙幅を縮小した。当時の新聞はその外観を競って、紙幅の大小を争ったもので「報知」などは「お座敷新聞」「教訓新聞」などと綽名されるほど大型で、広げると畳一枚ぐらいになる紙を用い、大新聞の威容を誇っていたが、先生はこれを半分ぐらいにせばめて小型にした。このことも新聞界を驚かせたものであった。

龍溪先生の改革は、更に営業部面にも及んだ。その頃の新聞の販売方法は、今と大差なく本社の直配達と、卸売とが二つをとっていたが、先生は直配を主とし卸売を従とする新方針をたてた。しかも直配の系統を組織的統一的に改革して、配達の敏速化をはかった。これは実に各社が後に市内各所に出張所を設けて、直配するようになった先駆をなすものである。「報知」はこの直配の販売収入の基本としたのである。

しかも先生は原料紙の購入にも常に注意きはらい、極力節約に努めるように指導した。先生が用紙購入のため、数軒の紙店と折衝を重ねていた際、某紙店からくる事務員の中に、とくに優れた経営の才に富む一人の青年を見出した。二三度会っているうちに、新聞経営にも恰好の手腕のあることを認めたので、本人に入社をすすめると快く承諾した。先生はこの名もない青年を抜擢して、販売の重任を託し、さらに工場主任を兼ねさせ、営業、会計までさせた。この青年こそ、後年「報知の大黒柱」といわれた三木善八その人である。

先生はさらに小栗貞雄を挙げて新聞局総務とし、編輯、工場、会計の連絡を円満敏速ならしめ、小栗を営業部、会計部、広告部の主任とした。小栗貞雄は先生の三番目の実弟で、後、先生が「報知」を去った時、当時外遊中のこの小栗が呼びかえされて「報知」を主宰した。この人は、幕末の頃勘定奉行として活躍し有名であった小栗上野介の養子となって小栗家を継いだ人で、後明治三十一年八月に行われた第六回総選挙に、時の憲政本党から出馬して当選し代議士になった。

かようにして「報知新聞」が大改革されると、見る見るうちに頽勢を挽回し、いくばくもなく一二を争う有名新聞となった。これには小栗と三木との力がおずかって大きかったとはいえ、この二人を選んで事に当らせた先生の慧眼に敬服せざるを得ない。

龍渓先生が試みた改革の計画を数え上げるとまだまだ沢山あるが、興味を引くものには、社員に対する奨励法、夕刊発行、海外電報の特約、瓦斯エンジンの使用などの新計画があった。

奨励法というのは、毎月社員の勤怠を見て、その手当を増減する方法で、例えば毎月百円を支給している者には、定給を五十円にし、その余りは一ケ月間に於ける勤務成績を勘案して、或るときは七、八十円を、あるときには四五十円を支給する。従ってよく働いて実績をあげたものは百二、三十円になり、怠けたものは七、八十円しか支給されないことになるので、社員を激励し能率を上げるのに大きな効果があった。

朝刊の外に夕刊を発行して見たが、その頃の社会状況や読者の程度が、今日ほどまだ夕刊を必要としていなかったので、三ケ月ばかりで中止した。

海外電報の特約計画及び印刷機の動力に瓦斯エンジンを使用する計画は、共に時期尚早で実現できなかったが、この時期にこんな計画を立てるだけでも、如何に先生に先見の明があったかをうかがい知ることが出来る。

しかしこの新聞経営の改革断行は、決して容易な業ではなかった。実に惨憺たる苦心の連続であったのである。例をあげると、今日の新聞はどんな新聞でも、購読料と広告料の収入で成り立っている。殊に広告料が新聞経営の根幹をなすものであるのに、先生が「報知」の改革を実施した頃の広告料の収入は、どの新聞でも極めて微々たるものであった。殆んど雀収入として取扱う程度で、収入は購読料にたよるより外になかったのである。しかもこの購読料には集金にさまざまな苦労があり、困難なことが多かった。こうした幾多の困難障害があったが、先生が断行した改革は成功して、発行紙数は四倍五倍に達し、収支がつぐなうようになったばかりでなく、数か月出ないうちに何程かの利益をあげるようになった。

なおまた、この当時、通信を業とする者に良いものがなかったので、先生は政米のニュースエセンシーに倣って「新聞用達会社」というものを創立し、各新聞社に材料を供給する業をした。先生は報知社にいた探訪記者を

全部この会社の社員とし、先生自らその社長となって経営した。後にこの社は発展して「帝国通信社」となった。

しかしながら今まで述べてきた様々の改革にもましてわが新聞界に生気を吹きこみ、溌剌たる新鮮味をみなぎらしたのは、龍渓先生の論説であった。帝政三年の新知識を傾け、明快にして典雅な独得な文章で、高く世界的な視野からあらゆる問題を鋭く論及して、読む人の眼を見ひらかさずにはおかなかった。また一方、政米の興味深い文芸を翻訳して、大衆の読物として喝采を博した。

当時に於ける龍渓先生の論説は、すべて世の人を指導し啓発するものであったが、就中かのシベリヤ鉄道計画を論評した一文などは、殊に世人の脳裡に深くやきつけるものがあった。その頃の大多数の日本人には、ロシヤは東洋に縁のない遥か遠い涯にある国のように思われていたが、先生はこのロシヤが今計画をすすめているシベリヤ鉄道は、将来必ず極東に大きな禍因となるであろうと、声を大にして警告したのである。スタンブールを奪わんとして果たさず、ペルシヤ湾を襲うて失敗し、大洋への進出口を求めて輾転反側、長い間苦んでいたロシヤは、遂に極東にその魔手を伸ばして野望を遂げんとしていることを喝破し、必ず遠からずシベリヤ鉄道を敷設するであろうと説いた。そしてその鉄道が完成した暁には、ロシヤは潮の如く極東に押し寄せ、満蒙の曠野は彼らの勢力範囲に帰してしまうであろうと、ロシヤの東進政策を論じたのである。

先生が喝破した通り、一八九九年（明治三十二年）にシベリヤ鉄道は全線開通し、翌年勃発した北清事変に乗じて満洲を占領し、なお侵略の手は朝鮮の北部に及ぼそうとするに至り、遂に日露戦争の起る原因となった。

この「シベリヤ鉄道論」は無論一例としてあげた論説の片鱗に過ぎないが、先生の論説は国民の眼を海外に注げようとするものが多かった。

先生が、いつも人より一歩、いや数歩先んじて世人を指導し啓蒙したことには全く頭が下がる。まことに一大先覚者たるの面目躍如たるものがあった。（この項おわり）

研究

佐伯城絵図解説 一

会員　小野英治

本図（次頁）は、元日本陸軍築城本部で蒐集したものを、当時築城本部勤務の山中光久元大佐が、ノートに書き写しておいたものである。

現在、原図の所在は不明であるが、恐らく東京空襲の際、焼失しているものではないかと思われる。しかし、この原図も築城本部の所蔵となる以前は、佐伯に伝来していたものであった。

明治三十二年四月四日から六日にかけて、毛利高政公入部三百年を記念して、佐伯開市三百年祭が行なわれているが、その会場の一つであった旧城三ノ丸御殿に、『佐伯城市見取図』として展示されていたのがこの原図であり、その時撮影した写真を佐伯市勝の高野喜助氏が所蔵されているが、原図のない今日、貴重な写真となっている。

この原図写真から見れば、約六尺四方とも思える大きな図面で、城と城下町が詳細に記されている。私の知る限りでは、佐伯城と城下町を詳細に描いたものは他に